

## 基調講演概要報告

一般社団法人 JEAN 事務局長 小島あずさ氏

## 【概要】

海ごみ、特にプラスチックごみについて、問題点、移動の仕組み、環境への影響、プラスチックの歴史、JEANの活動、私生活での実体験を交えながら講義いただき、結びに「私たちにできること」について講師の考えを述べられた。

## 【内容】

## ・海ゴミは昔からあったもの

しかし材質と量が変わった。昔のゴミは天然素材から作られていたので自然にかえる。使い捨てという習慣がなかった。今では大量にプラスチック製品を使うようになり、使い捨ても増えた。その結果、現在では海のゴミの7割がプラスチックになっている。

## ・海洋ゴミの問題点

汚い、分解されず残る、拾えないところに流れ着く、動植物への誤飲や絡まりなどの影響、細分化され回収できない、水産物への混入、漁業など経済への影響などがある。

## ・ゴミの移動

海流や季節風の影響を受け、海流の上流の国から下流の国へゴミが運ばれる。東南アジアや韓国からのゴミは日本に運ばれ、日本からのゴミはハワイやアメリカ大陸西海岸など様々な国にゴミが運ばれる。日本は都市部が太平洋側にあるため、ゴミの発生量はとてつもなく多い。日本海側では海岸のゴミは回収しても繰り返し再漂着するが、太平洋側から出るゴミは黒潮に乗って流れて行き、すぐ見えなくなってしまう。

## ・拾いに行くことができないゴミ

海底のゴミは、深海では水圧が強く、水温も低いためプラスチックの状態も長く残り続ける。観測はできるが拾いに行くことはできない。崖下のごみはほぼすべて漂着ごみであるがそこに行くための道は無く回収する人もいない。ゴミが2～3m溜まっている場所もある。さらに、ごみが海岸林に入ると移動せず居座り続ける。危険な個所もあり回収が困難。

## ・生物への影響

アザラシなどの動物は若いうちは好奇心旺盛でゴミに絡まりやすい。体が小さな若いうちに絡まり成長するにつれ体にゴミが食い込んでいく。

アメリカのミッドウェイ環礁は人が入れないようにし、環境を手厚く保護しているが、周辺がゴミだらけ。津波によりゴミが打ち上げられ、海鳥の巣周辺がゴミだらけになっている。1000匹を超

える海鳥の死骸を解剖した結果、すべての海鳥からプラごみが出てきた。3 個体分から出てきたゴミの写真には、日本のごみが出てくる。太平洋の海岸はいろんな国のごみがあるが、研究者によると日本からのごみが一番多いとのこと。

### ・ プラごみの問題点

分解しない、軽く移動しやすい拾えない場所にも、国、地域を超えて移動する。生物に絡まると外れない。消化しない。有害物質とくっつきやすく有害物質を運ぶ。プラスチックとは、石油から作られた合成樹脂。語源は「柔軟な、形成できる」。

発明当時は「夢の物質」と言われ、1950 年代から急速に普及していった。学者は当初からプラごみについて警鐘を鳴らしていたが、実を結ばず今に至る。

世界で年に生産される 4 億トンのプラスチックのうち 2 トンが使い捨て。日本人のプラスチック使い捨て量は一人当たり 32 kg/年（世界 2 位）

### ・ 国際海岸クリーンアップ

世界中で一斉に海ごみの清掃。日本では 1990 年から取り組まれている。

### ・ 海ごみの発生源

海以外にも山、街中なども相当量ある。路上や海辺での置き捨て、漁具等の資材流出、別の海から流れてくる、ポイ捨て、不法投棄のゴミなど。日本は雨が多く、川が多い、川の勾配が急であり、町中や山のゴミも海に流れ出やすい。

### ・ マイクロプラスチック

一次的マイクロプラスチック→はじめから 5mm以下で製造。洗顔料や研磨剤などに含まれる。

二次的マイクロプラスチック→大きなプラスチックが主に自然的要因により砕けたもの。

屋外で使用するプラスチックが紫外線や波浪、衝撃によって古いゴミはどんどん破片化し、人工芝やカラーコーン、衣類の合成繊維などもマイクロプラスチックになる。さらに食物連鎖により生物濃縮されていく。プラスチックごみ問題の世界の認識も徐々に変わりつつあるが、まだまだ課題は山積している。

### ・ EUでの取組

使い捨て飲料や食品容器の無償提供禁止。廃棄方法等に関する表示を義務化。普及啓発や回収処理を生産者が費用負担。罰則規定の義務付けなど。

### ・ 私たちができること

回収活動、発生抑制、普及啓発、環境教育、社会の仕組みの変革を行い、ひとりひとりが行動を変えること。